聴覚障がい児童生徒の理解のための研修会Ｑ&Ａ集

大阪府立生野聴覚支援学校
いくの言語聴覚支援センター(I-DIC)
2019 年４月改定

１．入学に向けての配慮点について　・・・　P.２

２．授業体制・指導上の留意点について　・・・　P.３
　授業体制
　進学に向けて
　その他

３．学習・教科指導について　・・・　P.６
　学習全般について
　国　語
　算　数・数　学
　英　語
　音　楽

４．生活指導について　・・・　P.１２
　本人の行動や性格など
　対人関係・友だち関係
　コミュニケーション

５．自立活動について　・・・　P.１５
　言語指導・ことばの指導
　発音指導
　障がい認識
　ソーシャルスキル

６．補聴器・人工内耳・FM 補聴システム等について　・・・　P.２０

７．その他　・・・　P.２１

入学に向けての配慮点について

○聴覚障がい児入学にあたっての配慮について、具体的に知りたい。

・まず保護者とよく話し合ってください。
（どんな支援をしてもらいたいのか要望をきく）

・ハード面の配慮の例です。
（騒音対策、FM 補聴システム、ロジャーの使用、パトライトの設置、視覚的な支援、ＩＣＴ機器、旗や太鼓の活用、情報保障　等）

・ソフト面の配慮の例です。
（聴覚障がいについての理解、聴覚障がい児の苦手なこと（ことばの問題や語い不足等）を知り、よりよい支援を）

○難聴学級設置に関して、どのような体制で臨めばよいか。

ソフト面とハード面の対策について知りたい。

・ソフト面については、難聴学級在籍者数にもよりますが、難聴学級での取り組みの内容を学校内で話し合うことが大切です。国語や算数、社会等を取り出しで行なっている学校もあります。難聴学級としての独自の取り組みをされているところもあります。保護者の要望も参考にしてみてください。

・ハード面としては、音環境を整えることがまず必要と思われます。できるだけ騒音の少ない環境で、楽に聴くことができる補助的な手段（ＦＭ補聴システム、視覚的な支援としての絵や図、手話等）を考えていくとともに、難聴学級担任が、全校に聴覚障がい理解を発信していくことも大切です。

新○小学校 1 年生に難聴の子どもが入学する予定。どんな配慮が子どもに必要か。

・きこえる子どもと同じように、入学にわくわく感と不安感を感じています。まず、学校生活に慣れることを優先してください。そのためにも、1 日の流れがわかるように、見える形（文字や絵）で示してあげましょう。急な予定変更にも気をつけ、そのときはきちんと伝えてください。入り込みの先生との関係を大切にし、見通しをもって、安心して過ごせるようにしてあげましょう。パトライトや時計や旗などを利用して時間の始まりと終わりがわかるように工夫してください。

○人工内耳の生徒が入学する予定。どんなことに気をつければよいか。

・人工内耳は医療機器なので、故障や修理等は、病院で対応してもらうことになります。電極部は電磁波や磁気の影響を受けるので、MRI などはできませんが、レントゲン、CT、家庭電化製品は影響ありません。

・基本は補聴器を装用している聴覚障がい生徒と配慮する点は同じですが、特に伝えておきたい人工内耳の注意事項としては、次のことがあげられます。

① 頭に強い衝撃を受ける可能性のあるような柔道や空手、サッカー等は避けた方が

よいでしょう。頭を打たないような配慮が必要になります。

② バッテリーの管理については保護者とよく話し合っておいてください。バッテリーが切れると、ほぼ聴こえなくなるので、学校で切れたときの対応や、確実に家庭で充電して登校することなどを確認しておいてください。

③ きれいに発音できていると、よく聴こえているように感じますが、聴き漏らしもあり、そのことに本人が気づいていないことも多いので、気をつけてください。

○人工内耳の手術をしたばかりの生徒が入学予定、もう片方は補聴器装用。どのような事に注意が必要か。

・人工内耳の効果を得るには平均半年程度のリハビリが必要です。半年の間はきこえも安定せず、本人も不安定な状態になる可能性があるので、見守ってあげましょう。もう片方の補聴器の補聴効果が高ければ、音楽もある程度楽しめると思います。もう片方の補聴器の効果が低いようなら、生徒本人が補聴器装用を嫌がって外す事も多いです。

授業体制・指導上の留意点について

＜授業体制＞

○入り込みの授業での支援のしかたについて知りたい。

・高学年になるほど、横に付いて支援されることを嫌がるケースがあります。同級生と同じようにしてほしいと本人が思っていることがあります。

・ノートテイクに徹する方法もあります。（要約、キーワード）

・必要な時にそばにいけるような合図を２人で決め、それ以外は後ろで見ておいたり、授業後、理解できていないと思われた箇所を確認したりする等、さりげない支援を行う方法もあります。

○「かくれて（内緒で）支援してほしい」という親子への対応や支援方法を知りたい。

・学習状況にもよりますが、まず、保護者の要望をききながら、できることを考えていきましょう。（複数の子どもを見るつもりで声かけをする、通常学級の教員が聴覚障がい児にも分かるような授業を行う、ことばの宿題をこっそり出す・・・）時間をかけて保護者との信頼関係を作り、日々の出来事を伝えていく中で、障がいをかくすことが本人にとってしんどいこと、ありのままの自分を受け入れることの大切さを伝えてください。「きこえにくいことは悪いことなのだ、知られたくない、かくさなければならないことなのだ」というマイナスイメージを保護者が持つことで、子どもも自尊感情が育ちにくく、自己肯定感を持ちにくくなります。そのような将来的な不安を伝え、自分で自分の障がいについて話せる子どもに育ってほしいということを、時

間をかけて話し続けてください。実際、学校生活の場面で日々、色々な事象が起きるので、そのときがチャンスと捉え、話し合っていくきかっけにしてください。一番しんどい思いをしているのは子ども自身だということを保護者に分かってもらいたいです。

○状況に応じた適切なサポートのあり方について教えてほしい。

・その場その場で対応も違います。具体的な場面の中で、子どもが必要としている支援を話し合いながら進めていくことがよいでしょう。

○通常学級で取り組める、きこえにくい生徒への合理的配慮にはどんなことがあるか。

・その個人にとっての必要な配慮が合理的配慮で、それぞれ個人の聴力や障がいにより、内容は変わってきます。ただ、全般的には教室環境の改善（座席の位置やＦＭ補聴システムの導入、騒音対策）や授業理解へのサポート（視覚教材の多用やノートテイク、話し方の工夫等）が考えられます。まず、保護者や本人とよく話し合うことが大事です。

○通常学級においての難聴学級（軽度）の児童生徒の指導について、学習支援をどのようにしていけばよいか。

・まず、音環境を整えることが第一です。その上で、教員の説明や友達の発言が聴き取れているか、常に意識しておく必要があります。聴覚障がい児童生徒が友達のほうを見てから話し始める、友達も伝わるように話す、担任がもう一度復唱する等の工夫やルールがあるとよいです。また理解を促すために、見て分かる視覚教材等の配慮があればよいでしょう。絵や図、文字カード等を準備したり、テーマやキーワードを文字で示したりするなどの手立てがあればわかりやすいです。

○きこえていないのか、きいていないのか、判断しにくい。
「わかっている。」と言うが、理解しているか判断しにくい。どうしたらよいか。

・視線がしっかり教員の方に向いているか、聴こうとする意思があるか等、子どもの姿勢や態度で判断してください。聴覚障がい児童生徒は「聴く構え」ができていないと聴き取れません。また、ずっと集中して聴くと疲れることもあります。また、聴いていても、話し手が早口で話している内容がわからないと、聴く気持ちも失せてしまいます。時々注意を促したり、視線を合わせたり、視覚支援を用いたりして、楽しく聴くことができるよう工夫してみてください。

・また、聴いていたか、理解していたか確認のために、「わかった？」と言うのではなく、「何がわかったのか」答えさせたり、教員が話したことを復唱させたりしてみてください。聴覚障がいのある子どもは「わかった？」ときくと「わかった。」と答えることが少なくないので、その一歩先の質問をしてみてください。

○集団の中で、友達の発表が聞き取れない。（書き写すことに時間がかかるので）どうしたらよいか。

・きこえにくい子どもはきこえる子どものように、書くことと聴くことを同時にはできません。そのため、授業では話をきく時間と作業をする時間をわけて指導していただくようにお願いしています。その上で、まず授業のやり方を検討してください。

最後にその板書を見ると１時間の授業がわかるように、書いてください。（中学校、高校は、黒板を二分して使用する等）

友達の発表は、声が小さかったり、早口であったりするので、なかなか聴き取れません。発表者のほうを振り向く間に発言が終わってしまうことも多いです。対策として

＊座席の位置を工夫し、（コの字型等）発言者をすぐ見られるようにする。

＊同時に複数が発言せず、発言時には挙手するなど話し手が誰なのかわかるようにする。

＊発言者が、聴覚障がいの友達のほうを向いて、伝わるように話すよう教員が指導する。（おなかから向く指導）

＊教員が発言者の発言内容をもう一度復唱する。（聴覚障がい児童生徒に分かるように）

＊入り込みの先生が補足をする

等が考えられます。

＜進学に向けて＞

○現在「ことばの教室」に通級している６年生の児童を担任している。
昨年度よりも、「音読」「書く力」ともに大きく成長したが、今後、中学への滑らかな移行のために、どのような力を育て、どのような指導・支援を進めていけば効果的であるか。

・中学校になると、学習のスピードも早く、また、教科担任制で、たくさんの教員と関わることになります。ことばの力をさらにつけていくことも必要ですが、それよりも、これからは自分で勉強していく、自分で分からないことは他者にたずねていくという姿勢を身につけていくことが大切です。色々な人に自分から発信して質問したり、説明を受けたりできる、また、参考書が読める語い力と理解力をつけていく。また、障がい認識とも関係しますが、きこえにくさを周りの人に伝え、分からないときは協力を求めることを伝えられる、等の力が必要になってくるでしょう。

○難聴学級から聴覚支援学校（中学部）へ進学する児童に、３学期どのような指導や配慮が必要か。

・特別なことはいりませんが、聴覚支援学校への進学を楽しみにできるような取り組みができればいいですね。今までと違い、きこえにくい友達がたくさんいること、小学校のように多くの生徒数ではないこと、聴覚支援学校には、パトライトや文字情報システムがあることなど、分かる範囲で伝えてあげればよいでしょう。もし、手話や指文字を知らないのであれば、負担にならない程度に、少しずつ覚えていきましょう。（入学後、自然と覚えるので、そのことで不安になったりする必要はありません。）

新○聴覚支援学校の小学部から中学部に進学した子どもと小学校から聴覚支援学校の中学部に進学してきた子どもとの違いは何ですか。

・コミュニケーションモードの違いが大きいです。地域の小学校から進学した子どもは手話がわからない場合もあります。遊びや習い事の経験など日常生活の中できこえる友達とのかかわりが多く、きこえないことに対する理解がある子どもが多いように感じます。

○高校入試に対して、配慮事項の申請等について知りたい。

・原則として、両耳の聴力レベルが３０デシベル以上で、補聴器を使用しても語音が明瞭にききとれない生徒は、英語のリスニングテストを別室での筆答テストによる代替を申請することができます。また、座席の位置の配慮なども申請できます。

配慮の申請は、所定の申請書に記入し、在籍校の学校長から市町村教育委員会を通じ、志願先高等学校を所管する教育委員会に申請します。詳細は、中学校を所管する教育委員会、もしくは志願先高等学校を所管する教育委員会に問い合わせてください。私学の高校は直接、志願する私立学校へ相談してください。

＜その他＞

○通級指導を行う上での指導法や留意点を教えてほしい。

・本校の聴覚障がい児童生徒の通級指導教室では、教育相談で、聴力測定、発音調査を行い、子どものきこえ、発音の状況を把握し、保護者の要望もおききして、補聴器管理を含む学習内容をそれぞれ個別に決めていきます。主な学習は、自立活動の内容を中心に指導を行っています。具体的には、きこえの学習、発音・発語学習、ことばの学習、コミュニケーションに関する学習、障がい認識学習などです。

基本は個別学習ですが、内容によっては、グループ学習を行うこともあります。

在籍学校との連携を特に大切にしています。

詳しくは、通級パンフレットをご覧ください。

学習・教科指導

＜学習全般について＞

○学習（授業）で大切なことは何か。

＊学習内容はことばによって定着させる

＊自分のことばで発表する

＊５W1H の活用（When　Who　Where　What　Why　How）

○語いが足りず、聞いた内容を正しく理解できないことがあるが、どうしたらよいか。

・分からない言葉があるときは、その前後の文脈で話を理解しようとします。
本当に理解できているか、最後に確認の作業をお願いします。
伝わらなかったときが語いを増やすチャンスだと思い、丁寧に説明してあげてください。初めて聴いた言葉等は、目に見える形でどこかに書いたり、貼っておいたりするとよいです。

○低学年からの学習で、特に積み上げておいたほうがよいことは何か。

・生活言語を増やし、深めていくことが大切です。そのためにも、学校や家庭での豊かな会話が重要になります。また本好きの子どもに育てましょう。子どもだけにまかせておいても本好きの子どもにはなりません。やはり親子や学校での読みきかせで、本の世界を共有し共感しあう体験が必要になります。ことばも同じで、何もしないと語いも増えません。意識して、身に着けてほしいことばを使って話をしましょう。
生活面では、指示待ちになったり、真似して動いたりすることが多いと、考える習慣がなくなっていきます。結果だけでなく、その経緯や因果関係も伝えるようにしてください。簡単なことでいいから自分で決めること、自分で考え「こう思う。」ときちんとことばで意見を述べさせることが大切です。

○難聴児が高学年に向かっていくにつれ、注意すべき点や指導に取り入れるほうがよいこと等があれば、教えてほしい。クラスの学習以上に支援学級で授業の補習以外にするべきことは何か。

・低学年の時は、ことばの学習（生活言語を深める、学習言語を増やす等）を中心に指導されていると思いますが、高学年になるにつれて、それら以外に、障がい認識や聴覚管理についての学習が必要になってきます。自分のきこえについて理解しているか、補聴器等をきちんと扱っているか、また、きこえにくさを他の人に説明できるか等、自分の聴覚障がいについて考えていく機会を持つことができればよいです。自分からきこえについて発信していける力をつけていくことは、将来必ず必要になってくるとともに、自己肯定感や自己実現につながっていきます。

＜国　語＞

○物語文の主人公の気持ちが理解しにくいのだが、どうしたらよいか。

・音声による微妙なニュアンスを理解しにくいためか、なかなか文章の行間を読み取ったり、気持ちを想像したりするのが難しい子どもが多いです。聴覚障がい児童生徒は視覚優位な子どもも多いので、絵や挿絵を使って、吹き出しに気持ちを記入させたりすると、うまくいくことがあります。低学年なら、劇化したり、ペープサートをして、気持ちを考えたりすることもあります。いろいろな機会を捉えて、ＳＳＴ的な指導（相手の気持ちを考えたり、お互いの意見を言い合ったり）も必要に応じて行ってください。

○音読は行なった方がよいか。

・声に出して読むことは、聴覚障がい児童生徒には語いを増やす意味でも大切な活動です。精読より多読が必要なこともあります。

・声を出し、口を動かし、筋肉運動や感覚を通じて学習すると、ことばを体で覚えられるので、理解や定着が早くなります。

○作文指導で、助詞や言葉（単語）の文字が一文字欠落することがよくある。
（150文字くらいの作文を毎日書いているが、必ず3カ所以上、文字の訂正がある。）

・ことばを聴き誤ったり、助詞を間違ったりすることは、聴覚障がい児童生徒にはよくおこります。間違って覚えていることばは、そのつど訂正して、正しく覚えさせましょう。
指文字で自分で何回も表現させたり、黒板のすみに書いておいて、目でいつでも確認ができるようにしたり、それらのことばを定期的に正しく覚えたか確認しましょう。間違った助詞は、その文を暗唱させましょう。

○使用している教科書に工夫があるのか。

・模造紙に大きく文章を書いたり、拡大コピーを利用して、全員で音読したり、書き込んだりしながら視覚的に理解しやすい工夫をしています。できるだけ下を向かないで、前を向いて授業に参加できるようにしましょう。

・下学年対応の子どもについては、取り上げる教材文をカラーコピーし、製本して使用しています。

・子どもの力に合わせて、分かち書きにしたり、空間を多めに取ったような本に作り変えたりしています。

・教科書に掲載されているもので、絵本がある場合は、絵本をカラーコピーして教科書として使用しています。

・リライト本を利用する方法もあります。

新○助詞の指導はどうすれがいいですか。

・教科書の助詞に丸をつけ、常に助詞を意識させ、音読の時もあえて指文字で助詞を示すようにしましょう。日ごろから保護者にも協力してもらって、家庭での会話でも気をつけてもらいましょう。助詞抜きや単語でのやりとりではなく、きちんとした文で話をすることも大切です。

○「て・に・を・は」など、助詞の使い方や、尊敬語、謙譲語、ていねい語の使い分けを教えるにはどうすればいいか。

・きこえる子どもには何でもない助詞の使い方は、きこえにくい子どもにとっては本当に難しい課題です。
作文などで、助詞を間違ったときは、その都度訂正し、正しい文章を暗唱させましょ

う。教科書なども暗唱するくらい音読練習をしてください。それでも、なかなか厳しい子どももいます。地道に取り組むことが大事です。

・敬語については、きこえる子どもでも難しいことがあるので、実際いろいろな場面で使い、その中で覚えていく、間違っているときは正しく言い直させる等、毎日の生活の中で使う体験を増やし、定着を図るのがよいでしょう。（もちろん授業の中での学習や説明は必要です。）

○濁点が必要なところにはなく、必要でないところにつけることがあるが、どうすればよいか。

・きこえにくさのため、音韻が入れ替わったり、違っていたり、ことばをまちがって覚えていたりということはあります。新しいことばや耳慣れないことばは、必ず文字で書いて確認することが必要です。そして、間違いを見つけた時はその都度指摘し、正しく覚えるよう指導してください。黒板のすみに、新出単語や新出漢字等を書いておき、常に見て確認ができるようにすることも効果的です。

○語い力をつけるための学習について知りたい。

・語い力をつけるためには、色々なことばに触れる機会をたくさん持つことです。
国語の力には、「きく」「はなす」「よむ」「かく」の４つの領域がありますが、「きく」課題が苦手なので、それを補う意味でも後の３つの活動を充実させる必要があります。

・毎日（絵）日記をつける。それを基に話をする。
・新聞記事などで、共通のテーマで話し合い、意見を言う。
・行事があるごとに文を書く活動を続ける。
・好きな本を毎日読む時間を設ける。
・ことばのプリント等を見て解くことでことばを増やしていく。
・漢字検定、語い検定に目標を持って取り組む　　等、

４つの領域を意識して、楽しくことばの活動を行なってください。そのためには、難聴学級や支援学級で個別学習を行なったり、複数の人数で取り組んだりすることも必要になるかもしれません。また、家庭との協力も欠かせないです。

＜算数・数学＞

○小3から補聴器を使用し始めたので、九九をまちがって覚えこんでいて、正しいものを何度練習しても、なかなか定着しない。

・九九は一度覚えこんでしまったら修正は難しいかもしれません。九九を正しく唱えるより、間違って覚えている箇所を正しく答えられたらよいのではないでしょうか。
九九のひらがな表示や実際の記入など、スモールステップを大切にして指導してください。

○中１の学習をほぼ理解できているのに、プラス、マイナスの計算が定着しない。

・きこえる子どもでも得意不得意はあります。あせらず丁寧に指導していきましょう。数直線を利用して、どこでつまずいているのか、スモールステップで確認していきましょう。

＜英　語＞

○英語の授業方法について知りたい。（特に小学校では文字を使わないので）

・聴力の違いもありますが、英語を聴きとることはなかなか難しいことです。
単語や英文を聴いても聴き分けられないので、見て分かる工夫が必要です。日本語の授業と同じように視覚的な支援が必要です。絵カード等を使うときはカタカナで読み方を示しましょう。会話をするときも、カタカナや発音記号で示し、チャンツ（日常的な場面での話しことばをリズムに乗せて表現したもの。英語独特のリズムを身に付け、相手に通じる英語を話せるようになるための教材）のように手拍子に合わせてリズムよく読めるように、区切りを入れる等、きこえに合わせて支援をしてください。フォニックスの学習方法も有効と思いますので、参考にしてみてください。

＊フォニックス（英: Phonics）とは、英語において、綴り字と発音との間に規則性を明示し、正しい読み方の学習を容易にさせる方法の一つである。英語圏の子どもや外国人に英語の読み方を教える方法として用いられている。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』より

○中学生の英語のリスニングテストの配慮はどうしたらよいか。

・本人の一番聴き取りやすい方法で行えばよいです。

・高校（私学を含む）の入学検査の実施方法は別室で受けたり、スプリクトで受けたりする場合がありますが、実際に中学で行っている配慮の実績が大切です。

○英語の会話練習について知りたい。

・聴覚障がい児童・生徒にとって外国語の学習は、様々な教科の中でも難しいもののひとつです。近年、英語学習を国際理解やコミュニケーション活動の視点で捉え、音声を中心にリスニングやオーラルスピーチを主体に学習を進めていく形に変わってきています。難聴の児童生徒にとっては難しい課題です。先生の指示がわかりにくいところへ、英語で指示されたりするとさらに聴き取りが困難になります。
外国語活動・英語の学習においては、その出発点が第一のつまずきになることが想像されます。最初に苦手意識を持ってしまうと、その後の学習も楽しくはならないでしょう。支援の方法としては、以下の点が考えられます。

・英語の発音の理解のため、ルビなどの視覚的な支援をする。

・聴覚の保障（ＦＭ補聴システムの活用や学習環境の整備など）をする。

・学習時にフラッシュカードやプレゼンテーションソフトなどを用い、音声情報と同

時に視覚情報を保障する。

・会話練習やリスニングの課題では、子どもの一人一人の聴力を把握し、子どもや保護者とよく相談したうえで実施する。

※外国語活動・英語の学習を始める前に、しっかりと日本語の語い数を増やしておくことが必要です。国語力をしっかり身につけておくことがなによりも大切になります。

学習を開始する時には、簡単で児童生徒がよく知っているような単語や文を使って、英語と日本語の発音の違いなどを事前に学習しておく必要があります。子音の指導は難しいので、ていねいにフォニックスなどで発音ルールを教えます。息だけの発音があることも教えておきます。まず読めることが大切で、読めたらわかることも多いです。

例えば book と boots では母音が異なりますし、子音ではc→[k]、sやph→[f]などのように、同じアルファベットでも発音が異なったり、発音が同じなのにスペルが違ったりすることがあります。

英語は表音文字のアルファベットで表記されますが、母音・子音ともに発音の規則性がわかりにくいのです。初めに細やかな指導をしておく必要があります。

また、アクセントなども同時に学習し、発音もできる限り正確にさせてください。日本語の発音の上手な子どもであれば、他の子どもたち以上に英語の発音が理解できることもあります。

＜音楽＞

新○音楽の教員が授業をしている時、入り込みの支援教員は授業で何をすればよいか。

・歌いはじめがわかりにくいので、拍子をとってカウントしてください。今どこを歌っているのか、楽譜や教科書を指さしてください。また、合唱の時は必ず指揮が必要なので、指揮をしてください。リコーダーなどは運指を教えてあげましょう。何をしてほしいのか子どもにきいてみるのもよいと思います。

新○音楽の鑑賞の授業は、電子教科書がない場合どのようにイメージさせているか。

・ユーチューブや DVD を活用したり、CD を流しながら、先生が指揮をしたり、楽器を演奏したりしていきました。また、歌詞からイメージさせて手話をつけたりして、イメージしやすいように工夫しました。DVD も字幕のあるものを活用してください。

新○合奏はどのように指導しているか。

・数字やメトロノームが出せる「ビートスピーク」というアプリを使って、カウントをとるようにして、どこを演奏しているのか分かるようにしています。８カウントで数えるとわかりやすいようです。

生活指導

＜本人の行動や性格など＞

○自尊感情が低いことが心配だが、どうすればよいか。

・いつも人から教えられる、受身の生活をしていると、なかなか自尊感情が育たず聴き間違い等でミスを犯すと、「自分が悪い、自分はダメな存在だ」と思ってしまうことが多いです。支援されることを負担に思わないように、聴覚障がい児童生徒が活躍できる場を作ったり、長所を褒め、ほかの人に役立つ手助けができることを考え、実践できる機会を設けたりする取り組みを行なうことが大切です。
いろいろな人がいて、お互い助け合って生きている、自分はかけがえのない存在だと思えるように育ってほしいです。

○自分勝手な行動をとることに対してどう指導したらよいか。

・指示をきちんと理解できていないことが考えられます。
最後まで人の話を聴く、そして最後に子どもに自分の口で言わせて、確認する作業を続けてください。それでも難しい場合は、スケジュールを視覚的に示したり、終わりが分かるようにタイムキーパーやライト等を活用したり、ルールを決める等、自分のスケジュールをコントロールできるような支援が必要です。

＜対人関係・友だち関係＞

○友達との関係が、高学年になるほど難しくなり、どう指導したらよいか。

・高学年になるにつれて、コミュニケーション上のトラブルが増えてきます。
聴覚障がいのことを正しくまわりの友だちに理解してもらい、友だちの話をきちんとききとれていないのに、「わかった」と言ってしまうことも多いので、誤解を少なくする取り組みを行いましょう。

○トラブルが起きた時に、その子の気持ちをうまく受け取ってあげることができなくて、困っている。

・話をきくときに、紙に絵や字をかきながらやりとりをしていくと、経過やその時の気持ちなどがきき取りやすいです。絵の中に吹き出しを書いて、気持ちを表したり、文字で表現しにくい時は、選択肢を書き、○をつけるなど、子どもの力や得意な方法に合わせて、きいてみてください。絵が得意な子どもが多いので、ことばでうまく伝えられなくても、絵を描くことで、状況が整理されやすいです。

○通常学級において、まわりの子から聴覚障がい児童生徒への働きかけをどう促せばよいか。

・聴覚障がい児童生徒にとって、まわりの友達との関係はとても大切です。よい友達関係ができていれば、毎日の学校生活がとても過ごしやすいでしょう。困っているときやききとれなかったときに、さりげなく手助けしてくれる友達は本当にありがたい

ものです。
まず、聴覚障がい理解授業を行い、まわりの友達にきこえにくさのことを分かってもらう必要があります。その上で、聴覚障がい児童生徒に限らず、お互いを思いやる気持ちや助け合う等、ちょっとした気遣いや気配りができるようなクラス作りを担任が働きかけてみてください。
聴覚障がい児童生徒が「きちんとききとれたかな。」と、担任が率先して、声かけをしてください。まわりの子の発言も聴覚障がい児童生徒に伝わったか本人が気づけるように教員が声かけするとともに、聴覚障がい児童生徒も積極的に、分からないときは教えてほしいと友達に言えるようになってほしいです。そんなポジティブな関係がよい友達関係につながるのでしょう。

○友達関係の作り方。きこえと関係はないかもしれないが、友達に対してきつくあたる。友達が離れていくので、どうしたらよいか。

・しっかりと本音で話し合う必要があります。自分はどうしたいのか、友達はどう思っているのか、聴覚障がいがあるからという理由で、特別扱いや遠慮をする必要はなく、（もちろん、きこえに関する配慮は必要ですが）しっかりとクラスで、お互いの気持ちをぶつけることが大切です。相手の気持ちが分かりにくかったり、行間、その場の雰囲気が読めなかったり、見えたところだけで判断したりしがちな聴覚障がい児童生徒も多いです。面倒ですが、とことん、ていねいに関わっていかないと難しいと思います。自分の行為を振り返るとともに、スポーツイベント（球技大会）やコンクール、係り活動等で、みんなと協力してできた成功体験をふやしてあげましょう。

○入学して以来、クラブを2回もかえている。友人関係もなかなか長続きしない。
本人はそのことに何の不安もないことが心配であるが、どうすればよいか。

・教員として心配に思っていることや、友達の大切さ等について、じっくり話をする機会があればそのつど話をしてください。そのときは理解できなくても少しずつ何かのきっかけで身にしみることがあるかもしれません。あせらず、長い目で見守ってあげましょう。

＜コミュニケーション＞

○適切なコミュニケーションの取り方を身につけさせたいが、どうすればよいか。
（ちょっかいをかけたり、追いかけたり・・・。）

・人と関わりたいけれども、自分が持っていることばではうまく伝えることができないので、態度や行動で表そうということになっていると思われます。
ことばを増やすことと、自分の気持ちを伝えるような SST（ソーシャルスキルトレーニング）の学習を行い、簡単なことから、きちんとことばで伝える練習をすることが大切です。また、もめごとが起きた時は、落ち着いてきちんと流れに沿って、教員がその時の気持ちや取った行動をききだし、ことばに置き換える作業（言語化）をし

て、話をさせる地道な取り組みが必要です。そうすることが、聴覚障がい児童生徒がことばの力をのばし、適切なコミュニケーションを身につけていく近道になります。

○自分が話していることを、相手が理解していると思い込んでいるが、どうしたらよいか。

・将来的にも自分の話していることがきちんと伝わっていないと自覚することはとても大切なことで、自分の障がい認識にもつながります。相手も「わからない。」と本人に伝えることが必要です。

○話しかけられた内容の１部のみを聴いて、途中で「わかった。」とさえぎって終わらせようとするが、どう指導したらよいか。

・聴きとれたことばだけに反応して「わかった」と思ったり、聴いていても分からないので、最後まで聴こうとしなかったりすることが考えられます。まず、傾聴態度をきちんとつけさせることと、聴覚障がい児童生徒（相手）が聴きとれるようなコミュニケーション手段で確実に伝えようとする教員側（話し手側）の姿勢も大切です。いやがりますが、妥協しないで、きちんと内容を復唱させ、内容の確認を必ず行うようにしましょう。

○言動が幼く、集中力がなく（自分の世界にはいってしまう）、同年齢の生徒とうまくコミュニケーションがとれないが、どうしたらよいか。

・聴覚以外の障がいも考えられますが、きこえにくいため、今、流行っていることや、芸能界やスポーツ等のテレビの話題に疎くて、話がかみ合わないことがあります。
年令が上がるにつれて、そのギャップはますます大きくなり、うまく学年相応のコミュニケーションがとれない状況になりがちです。友達の話のスピードについていけないこともあります。難聴学級や支援学級で、ゆっくりリラックスして、本人が楽しめるコミュニケーションの場を設定してみることを考える必要があるかもしれません。

○クラスのグループでの話し合いで、まわりの子どもの話しているスピードが速いので話している内容が理解できているのか心配。グループ活動での良い方法を知りたい。

・一つの教室でグループに分かれて話をすると、全体がざわざわしているので聞き取りにくいです。誰が話しているのかもわかりにくく、話し合い活動は聴覚障がい児童生徒は苦手です。別室で行うか、補聴援助システムを活用してください。
支援としては、発言者をはっきりわかるようにする、聴覚障がい児を見てゆっくり話す、などが考えられます。横に支援の先生が付くこともありますが、それぞれの意見などをミニボード（ホワイトボード）に書いて見せ合うことで視覚的に支援することも一つの方法です。他には、小さいメモの束を用意しておき、その都度書いて見せて最後に綴じるとノートになるのであとで振り返りやすいです。

自立活動

＜言語指導・ことばの指導＞

新○言語指導で、大事だと心がけていることは何か。

・子どもをよく観察し、何を言いたいのかをしっかりときくこと、そして子ども自身の思いや個性、背景が感じられる生きたことばで話をさせることが大切です。指導のコツは、関係をしっかり築き、指導者が楽しいと感じることです。

新○集団でも、言語指導ができるのか。

・集団で、子ども同士の聴力や語い、コミュニケーション手段など、スキルの差があっても大丈夫です。集団での関係性を築き、子どもたちが話したくなる環境を作ることです。

新○ことばがとても遅れていて、言語指導が難しい場合、どうすればよいか。

・座学をする前に、生活の中でのやりとりがたくさんあり、服を着たり、給食を食べたり、生活にまつわることばを一緒に覚えていくことが大切です。ことばが覚えられない子どもには身ぶりや手話も入れて、将来社会に出て人と関わっていくとき、どんなことばの力をつけておきたいかよく話し合うことが必要です。

・社会見学や遠足などで、心が動いた時のことばは身につきやすいので、その日のうちに確認したり、事後の作文指導などでていねいに学習したりするようにしています。

○言語学習（語い、助詞、文作り、作文など）で、効果のある指導方法を教えてほしい。

・ことばの意味と場面に適した使い方を教える。（耳から自然に音声が入らない）

・ことばの絶対量の不足を補うために（聞き覚えができない）現状よりも少し多く子どもに話をさせる。（教員よりも子どもの話を多く）

・１問１答式の授業から子どもにかえす授業へ

・教員が「よいきき役」にまわる。

・斉唱・復唱・追唱

・書かせる指導を多くする。

　日常の話題を毎日日記に書く　　子ども同士の手紙のやりとり　等

　（書く力をつけるには読むことが重要）

文作り

・主語と述語の関係を意識させる　正しい文章で話す習慣をつける。

・書く以前に話しことばに問題を持つ子どもが多い。豊かなコミュニケーションを心がける。

・書く意欲を高めるには「ほめる」。そして教員のコメントを活用する。

助詞

・基本の文を徹底的に暗記させる。

作文作り

・書かなければ書く力は伸びない。「ひたすら書かせる」(技能学習)

＊書きたい気持ちを高めるには　「書く前の指導が非常に大切」です。

事前に書く話題について子ども同士の話し合いを十分に持つ。

相手を決めて何かを知らせるために書く。

内容を焦点化する（書き出しを与えたり、枠づけしたりする)。

○ことばを教えてもなかなか定着しないが、どうしたらよいか。

・「ことばを教える」との事ですが、ことばの意味を教えられてもことばは使えるようにはなりません。実際にそのことばを使った経験をして、自分が言いたいと思う状況が必要です。ことばとは実感して出るものであって、教えただけでは身につきません。逆に、子どもをよく観察し、言いたそうなことばを見つけて「こういうときは○○と言うんだよ」と伝えてあげられると、ことばは身につきやすいです。

＜発音指導＞

○発音指導について、大切なことを教えてほしい。

・基本は息です。口の周りや舌の動きのなめらかさも必要です

・母音の発音をていねいに正確にする。

・５０音をリズミカルに発音する（行読み、段読み、３拍子読み　等）

○発音の指導について知りたい。

・準備として、息の練習や顔の筋肉をほぐす、舌体操を行います。母音の練習は、毎回行ってください。そのうえで、苦手な音の練習をします。グッズ（お菓子、風船、シャボン玉等）を使っての指導は楽しみながら行えることが多いです。

○発音　さ行の指導　き音、け音の指導について知りたい。

・さ行音は舌先を軽く下歯裏にふれ、上歯裏とに隙間を作り、息を出すことがポイントです。ストローを使って息を出す練習が効果的です。

・か行音は奥舌をあげて軟口蓋につけ、息を止めて急に出すことがポイントです。うがいをする練習も行ってください。

○さ→た、す→しゅなど、発音不明瞭なことがあるが、どの程度授業中に指導すればよいのか悩んでいる。

・授業で出てくることばの中で「さ」や「す」の入ったものをあらかじめチェックし、まず１つ、その中から発音に注意して話す言葉を絞り込んで（絵カードなどを作って

おく）はどうでしょうか。うまく発音できたら、宿題としてカードを持って帰ってもらい、家庭でも練習して保護者のサインをもらう等の方法で定着を図ることができると思います。

○耳から聞いた音をちがって言語化してしまう（ダウン症）が、どうしたらよいか。

・ダウン症児の場合、聴覚障がいがなくても発音が不明瞭なことが多いです。理由として以下のような傾向があります。

・知的障がいがあり、ことばを正しく記憶（記銘力の弱さ）できない。忘れる。急には思い出せない（語想起が弱い）。→ことばが身につかない、語いが増えない。

・音韻分化が進んでいない。→日本語の「五十音」が曖昧。

・口腔内の構音機能（舌、唇、息などの調節）が不器用。

・音のフィードバック（きいた音と自分の言った音の違いが分からない）による調整力が弱い。→正しい発音や構音の仕方を教えても修正できない。

・聴覚障がいがあるダウン症児の場合、さらに困難といえます。他の視覚支援（文字や記号の活用）を使いながら発音の基礎練習をしましょう（『ただしい発音』参照）。日常の身体を動かす粗大運動、食事の時、口を閉じて噛む、歯磨きをする、口を閉じて息をする等も大切なことです。明瞭な発音を求めるよりも、語いを増やすこと、文を書いたり（正しくことばを覚える）、どんどんおしゃべりを楽しむ（言い慣れる）ことが大切です。

○濁音（特にＺ音）等の発音指導について知りたい。

・Ｚ音は、聴覚障がい児にとって、一般的に習得が難しい音とされています。調音部位が同じである「Ｓ音（さ・す・せ・その子音）」の発音技能にも関連します。指導の前提として、さ、す、せ、そ音は明瞭に発音できているかの確認が必要です。

１）さすせその子音〔ｓ〕のときは、無声音なので下あごはひびきません。これに対しざずぜぞの子音〔ｚ〕のときは、有声音なので下あごがひびきます。

舌の前方と上歯茎でストローをはさみ、息と声を一緒に出して、ストローを吹いてみましょう。

２）「あーざーざー、うーずーずー、えーぜーぜー、おーぞーぞー」と発音してみましょう（母音先行法といいます）。

３）「さ・ざ・な、す・ず・ぬ　せ・ぜ・ね　そ・ぞ・の」と発音してみましょう。

うまくできたら、「さざな、すずぬ、・・」とつなげて発音したり、一息で「さざな・・・そぞの」と発音してみましょう。

４）「ざぶとん」「さざんか」「ぎょうざ」など、「ざ行音」が色々な位置（語頭・語中・語尾）にくる言葉で練習してみましょう。

○無声、有声の区別が難しく、発声すると言えたり、言えなかったりするときがある。
定着するにはどうしたらよいか。

・まず、心身ともにリラックスした状態でいることが大切です。
・声あそびとしては、風船やセロファンに唇を当てて、声を出したり、「おーい」等の呼びかけあそびも使えます。
タブレット型パソコン等を使って、発声練習用のアプリで練習する方法もあります。

○現場で取り入れやすい発音方法（練習方法）を教えてほしい。
今は発音やきこえのチェックをしている。発音指導で良い方法があれば教えてほしい。

・まず、日常会話の中で児童がしっかり口を動かして声を出す習慣を身につけることが大切です。何をねらうかにもよりますが、準備が簡便で、比較的短時間でできるものに「あいうえおのうた」があります。インターネット等で検索するとたくさんあるので、子どもに合ったものを選んで、朝の会等で朗読してみてください。その際、口をしっかり動かすことと、おなかに力を入れて声を出すように指導することが大切です。

○聴き取りにくい音が発音しにくいが、どうすればよいか。

1　聴き取りにくい音を教員がどうすれば伝わるか（指文字はあまり覚えていない）。
2　正しく発音できない音はなんとか伝われば訂正しないでよいか。訂正するなら、その方法を知りたい。

・1　確実に伝えるためには、指文字も分からないのであれば、文字で示すことです。黒板に書いたり、常にメモや小さなホワイトボードを携帯して、見せることと、聴覚障がい児童生徒は前後の文脈でことばを判断していることもあるので、語いを増やすことも大切です。
・2　いつも訂正させられたら、イヤになることもありますが、気になったときに、もう一度言い直させたりはします。そのことで、話をするのがいやになったら逆効果なので、様子を見ながら行ってください。訂正して正しく発音できるのであれば、本人の意識の問題もあるので、おおいに誉めることで改善されるかもしれません。中等度難聴であれば、聴覚活用して正しい発音や自分の声をフィードバックさせることで改善されることもあります。何とか伝わればよしとするときと、発音を中心に取り組むときと分けて考えてもよいでしょう。音読についても同じことが言えます。発音の学習は苦手な子どもが多いので、楽しく取り組んでください。指導方法については、出ない音によって違いますので、「ただしいはつおん」等を参照にしてください。

＜障がい認識＞

○本人が補聴器をつけるのをいやがるが、どうしたらよいか。

・補聴器をつけるのをいやがる理由（例：イヤーモールドの装着感、調整の具合、等）

を保護者とも連携して突き止めて対応することと、遊び等を通して、きこえることのメリットを体感することが大切です。

○手話を使うことで「第三者になれる」との事ですが、手話を使わない生徒と家族に、どのように手話を勧めればよいか？

・第三者になるというのは、客観視ができるようになるという事です。手話を強制する事はできませんので、思いやりの気持ちを持ったり、もし自分ならどうするか等を考える事が大切です。他者の意見など判断材料を示しながら、その生徒が自分で考えて判断できるように導いていきましょう。

○自分で考えられない、友達のしていることを見て動くのみ、という子どもにどのような指導がよいか。その子用にと考えた宿題を出してもできない。

・何かを始めるには手がかりが必要です。子どもにわかるような手がかりには何が適切か、その子がどれだけ場やことばを理解できているかをまず知る事が大切です。聴覚障がい児童生徒に「わかった？」ときくと「だいたいわかった」と答える事が多いです。本当に内容を理解できているかを確認しましょう。

○成長と共に徐々に聴力が低下している様子で、そのことを「私は他の人とちがう・・・」と悩んでいることに対して、どのような対応、支援ができるか。（本人は聴覚障がいであることを周囲に知られたくない）

・本人にとっては、聴力低下はとてもつらいことです。その気持ちをまず、しっかりと受け止め、きこえについて本人の悩みをきく等、たくさん話をする時間を作ってください。自分のきこえのこと、将来の不安、これからどうしていけばよいか、今できることは何か、障がい受容、進路のことも含めて話をしてみてください。いろいろ話し合う中で、何かが見つかるかもしれません。また、聴覚障がい者はあなた一人ではないこと、たくさん活躍している人がいるなど、孤立感や孤独感を持たないような支援も必要と思われます。

＜ソーシャルスキル＞

○ソーシャルスキルの教え方を知りたい。

・ソーシャルスキルは時間があれば、設定して、計画的に学習できればよいです。「こんなときはどうする？」「こんなときは何と答える？」等、場面設定をして、①教示②モデリング③リハーサル④フィードバック⑤般化の手順で、環境を整えて指導してみてください。それとともに、日常生活の中で、機会あるごとに指導していくことも大切です。

補聴器・人工内耳・FM 補聴システム等について

○補聴器と人工内耳では、聴き取りやすさに違いはあるのか。

・個人の残存能力によります。人工内耳はうまく効果が得られると最高で 25 dBの音が入ります。しかし、装用直後は機械音に聴こえると言われており、音に慣れるまでに半年程の訓練と調整が必要となります。

○人工内耳の手術をしたばかりで、もう片方は補聴器の生徒が入学する。どのような事に注意が必要か。

・人工内耳の効果が出るまでには半年程度の訓練と調整が必要となります。その間本人は不安定なきこえになっている状態なので見守りが必要です。もう片方の補聴器の補聴効果が高ければ音楽も楽しめると思います。しかし人工内耳の効果が出てくれば、もう片方の補聴器を外してしまう子どももいます。本人が補聴器を煩わしく感じているという事ですので本人の意思も尊重しつつ、保護者や医療機関等とも相談してください。

○人工内耳は一生使えるものなのか。機械の入れ替えなどの為に今後再手術が必要になるのか。

・インプラントは一生使えるものですが、機械は日々進化しています。プロセッサーはすぐに新商品に交換可能ですが、体内に埋め込むインプラントは手術が必要になります。また、故障の場合は保険適用になりますが、故障ではない交換は保険が効かず 100 万円程かかることもあります。買い替えの補助をだしている自治体もあるので調べてみて下さい。

○現在、右に人工内耳、左は補聴器装用の生徒がいるが、補聴器は外し人工内耳だけで生活している。ご両親は 2 台目の人工内耳装用の為に、左の補聴器を着けてほしいとの事だが、補聴器を外してしまう事で、残存聴力への影響はあるのか。

・あると思います。人工内耳の手術は小さい頃がよいといわれているのは言語獲得期の為ですが、残存聴力の活用がしっかりできていれば、5 歳くらいで手術をしても効果が高いと言われています。中学生であれば、2 台目の人工内耳をするかは本人次第ですので、本人が希望するのなら、補聴器をつけて聴力を活用しておく方がよいと思います。

○人工内耳部分への衝撃はダメと言われているが、ダメなスポーツはどのようなものがあるのか。ヘルメットをしての野球はどうか？聴覚支援学校中学部ではどんな部活をしているのか。

・中学部ではサッカーもしていますがヘディングは禁止しています。人工内耳をしているからといって体育の授業で外すことはありません。マットや鉄棒等でプロセッサーを外して行う生徒はいます。本人の意識と周囲の理解が大切です。卒業生でサッカーのプロチームに入っている人もいます。他の聴覚支援学校ではスライディングで故障したという話を聞いた事があります。

○頭をぶつけてはダメなのは、人工内耳が壊れるからか。

・プロセッサー(外部機器)は修理ですみますが、インプラントが破損すると再手術が必要になります。またインプラントは精密機器で衝撃に弱いので注意が必要です。

○補聴援助システムのロジャーを２台同時に使う場合（ロジャーインスパイロ、タッチスクリーンマイク）、1 台で対応できるのか。

・集会ではタッチスクリーンマイクで２台とも可能です。教室に戻ったら、インスパイロでグループを作り直して下さい。
タッチスクリーンマイクを使う時はタッチスクリーンマイクのパスワードが必要ですが、インスパイロに切り替える時はインスパイロのパスワードボタン１つで可能です。

○今、1 年生 1 名がインスパイロを使用しているが、新 1 年生にも聴覚障がいの生徒 1 名が入学する。タッチスクリーンマイクを新たに購入して新 1 年生に回そうと考えていたが、新 1 年生にインスパイロを回した方がよいか。

・どちらにインスパイロを回すかは、グループワークの多さによって判断してください。

○現在インスパイロを使用しているが、親機１つのみ。グループワーク時にはマイクを聴覚障がい児童のそばに置いているが、使い方を間違えているのか。

・マイクは話し手の音声を拾う為のものなので、その使い方では全く意味がありません。話し手が頻繁に代わる場合、マイクを持つのが面倒に思われる事もありますが、ボールペンにピンマイクをつけて回す等の工夫をしてみてください。

○ロジャー等の購入に補助金などはあるのか。

・ロジャーの所有を個人にするか学校にするか、という問題があります。学校備品になると児童が持ち帰ることはできませんし、充電などメンテナンスを含め学校が行う必要があります。
・身体障害者手帳２級３級であれば FM 送受信機に補助が出ますが、４級６級には出ません。申請については、居住地の各市役所、町村役場等に、問い合わせてみてください。

その他

○消音のためにテニスボールを机、いすに付けた。ボールを切ることが大変だったが、良い方法や代わるものはあるのか。

・テニスボールをます(木ますがなければ、牛乳パックなどを使用)に入れて固定してから切ると切りやすいです。一斉に、たくさんの人数で分担して行うことが良い方法だと思います。春休みなどにみんなで作業される学校もあります。
切り取った牛乳パックを並べて、ガムテープなどで固定すると、効率よくできます。
フェルトを輪ゴムでつけるなどで代用もできます。